

原題 「海軍」

原文はB5判3ページ。

以下、原文をそのままにA4判に変換し、欄外にページを付与したもの。

次ぎに申し残したいことは、最初に触れた驕り症候群についてである。人間はとかくうまくいったときには思い上がり、まずいときには落ち込む傾向があるが、日本人はその幅が大きいのではなかろうか。真珠湾攻撃の成功によって国家総動員態勢のスタートが遅れたのもその一例である。海軍もその例外ではない。引き揚げてきたアメリカ駐在武官が、米海軍省の非常執務態勢に比べ、海軍省も軍令部も定時出勤、定時退庁、平時そのままの執務状況に驚いたこと、イギリス駐在武官が、首脳部に、イギリスを風前の灯火と見ているのは間違いであるとして、経済力、精神力、戦争指導等の実例を挙げて報告した際、多くは居眠りをしていて反応がなかったこと、などからも、一端が伺われる。

実施部隊の方も、真珠湾攻撃以前の虎の尾を踏むような慎重さと、呉の市民も今度はミッドウエーだと知っていた油断の差は顕著である。確かにこのときは兵力も練度も遙かに敵に優っていた。暗号が解読されて、手の内は全部知られていたが、まともに戦闘すれば、決して負けることはないはずであった。良く知られていることであるが、その敗因のうち

* 敵機動部隊が待ち受けているとは全く考えなかったこと（潜水艦の哨戒配備の遅れ、杜撰な捜索計画とその形式的実施、敵空母存在の通信情報の未達（注）「敵の通信状況によれば、ミッドウエー北東に母艦あり」という6Fからの電報を東京から放送した。山本長官が機動部隊に知らせなくてよいかと念を押されたが、黒島先任参謀が当然受信しているのでその必要はないと答えてそのままになった。機動部隊で受信していないはずはないが、首脳部には届いていない。要務処理の不適切と思われる。

敵艦隊攻撃のため拘置した航空機を陸上攻撃に転換)

* 敵空母の存在を知ってからの緩慢な処置
などは、まさに驕りが大きい要因になったと思われる。

山本長官は4月末第一段作戦研究会の席上で「敵ノ軍備力ハ我ノ5ナイシ10倍ナリ（中略）常ニ敵ノ痛イトコロニ向カッテ猛烈ナ攻撃ヲ加ヘネバナラヌ、然ラザレバ不敗ノ態勢ナドハ持ツコトハ出来ヌ」と厳しく油断慢心を戒めた。しかし、ミッドウエー作戦前の凶演で統裁していた宇垣参謀長が、審判標準に基づく判定を、我に有利なように自儘に変更するなど、司令部の幕僚自身が思い上がりを免れて居らず、それまで実際に戦果を挙げてきた機動部隊はもとよりであった。

この当時の装備や術力が素晴らしく、その格差を維持して全幅発揮しておれ場、戦争の経過も大きく変わったと思われるだけに、特に上級司令部の驕りと気の弛みが惜しまれる。「神明ハ(中略)一勝ニ満足シテ治平ニ安スル者ヨリ直ニ之(勝利の栄冠)ヲ奪フ古人曰ク勝テ兜ノ緒ヲ締メヨト」との東郷長官

この反省から論理的判断力と養うことが本校教育の一つの眼目とされたのであり、諸君もよく身につけて欲しい。

情報軽視とも関連するが、戦果確認が不十分であったことは、その後の作戦に多くの影響を与え、又正式発表に対する信頼を失わせることになった。台湾沖の航空戦がもっともよい例であるが、確認が困難で錯誤の多い夜間航空攻撃の成果を、現場の報告を鵜呑みにし、翌日の偵察等の手段をとらず、あるいはこれを無視し、全般情勢の推移から大局的に評価判定しなかったこと、

(注) 台湾沖港空戦の直後ルソン島東方に4隻の空母群2群を発見した。いくらアメリカでも無尽蔵に空母があるわけではないと考えつつ、これは沈めた空母とは別だということにしてつじつまを合わせたという。

また潜水艦を攻撃した成果も現場の報告だけに頼り結局累計すると膨大な数になったことなどは、必ず確認の手段を講じ、あるいは裏付けを求めた米海軍と比較して、日本海軍の甘さが顕著である。

これらは、戦死者に対する配慮もあったが、論功行賞にとらわれた体質も一つの原因であり、上級司令部や中央の統率が誤っていたためではなかろうか。現場重視とは、机上ではなく、現場の状況に即し、その判断や意見を尊重することであって、決して甘やかすことではない。戦果の判定に当たっては、上級段階ほど、手段を尽くして情報を求め、厳しい評価を行い、現場部隊はその評価に服する隊風を確立すべきであろう。

次ぎに申しておきたいことは、戦訓の蓄積と活用である。米海軍は真珠湾攻撃直後空母中心に兵力整備を転換した。また第一次ソロモン海戦後巡洋艦、駆逐艦の戦術を検討し、訓練を励行するなど、教訓の活用は見事であり、迅速であった。それと比較して、日本海軍の教訓の調査、整理、活用の態勢は誠にお粗末であった。ミッドウエー海戦後「つけば何処も穴だらけ」との理由で戦訓の調査も研究会も実施されず、機動部隊では、二段索敵の実施、空母ダメコン対策など身にしみた教訓を生かしたが、海軍全般で組織的に教訓を学び活用する着意のなかったことは、論外と言うべきであろう。これは機密保持が優先したためでもあるが、もともと海軍に戦訓を積極的に調査し活用する着意も態勢もなかったのである。

兵術的研究調査に任ずべき海軍大学校は解散同様に配員はなく、各術科学校も術科面からの戦訓を調査研究する配員はなかった。

最期に最も重要なことの一つを申しておきたい。それは日本海軍にはロジスティクスという観念のなかったことである。もちろん燃料の補給とか艦船の造修、航空機の生産整備、施設の整備、輸送などは極めて重視され、個々の組織はよく整えられて、立派な人材は配されたが、それらを総合して部隊を支援するという考え方はなく、従ってロジスティクスが作戦の成り立つ前提であり、作戦の成否を支配することに考えが及ばなかった。

基地航空部隊の作戦にしても、基地の獲得整備は考えても、その後如何にして基地機能を維持し、作戦を継続発展させるかの着意が不十分であった(基地防空、航空機の整備、部品の補給、燃弾の補給備蓄、施設の修理復旧、搭乗員の交代等)。つまり海軍は航空作戦の総合的検討が十分であったとはいえないのではないか。

このロジスティクスを重視しなかったことは、自らの作戦に支障を来しただけでなく、敵のロジスティクスを攻撃する着意を欠き、大きな不利を招いた。ハワイの第二撃問題、潜水艦の用法、敵輸送部隊攻撃あるいは後方施設破壊の軽視などはその例である。

もし海軍が最初からこのロジスティクスを真剣に考えたとしたら、果たして開戦に踏み切ったか疑問である。